

トヨタ財団研究助成プログラム
オープンワークショップ（福岡会場）参加記

九州大学大学院人間環境学府 松浦優斗

トヨタ財団の研究助成プログラムの特徴としてまず挙げられるのは、研究の問題設定が具体的だということである。そして具体的な問題設定は、その具体的な実践へとつながっていく。今回の報告はいずれも、社会における具体的な問題に対して、研究を通じて実践的にアプローチするものだった。そのアプローチの仕方も多様で、研究のプロセスに現場の人々を引き込むものもあれば、研究を通じて出会いの契機を生み出すものもあり、さらに記憶や記録を通じて過去や未来の他者へとつながるものもあった。このような研究と実践の往還が、それぞれの報告の随所で重要な役割を果たしていた。

「社会の新たな価値の創出をめざして」というテーマのもとで行われた各報告は、同時に社会の既存の価値へと問いを投げかけるものでもあった。言い換えれば、従来で他者化されてきたものを引き受けることによって既存の価値を相対化する、という側面を含んでいた。たとえば渡邊悟史氏の報告は、人々の居住区域に現れたヤマビルを単なる排除すべき異物としてではなく、人間と自然の関係の変化が表面化したものとして捉え、そのことの意味を積極的に引き受けようとするものである。山林と人とのかかわりが失われたがゆえに出てきたものとしてヤマビルを捉えなおすことで、ヤマビルを単なる他者ではなく、私たちの生活と関連するものとして考える視座が開かれる。そうした視座を持つということは、私たち自身へと問いを投げかけるということであり、さらに社会における〈不気味なもの〉との共生という「新たな価値」につながりうるものとなるだろう。

このように、「新たな価値」を作り出すときには、多かれ少なかれ既存の価値を相対化するという側面が伴う。そうした価値相対化の営みのなかでは、研究者自身にも問いが差し向けられる。研究という行為は、研究対象を客体化して、分節化して、分析する営みと見なされてきた。それに対して、今回の報告はいずれも研究と実践との架橋を重視しており、研究者と調査対象・社会との間に有意義なフィードバックが生じている様子が随所で垣間見えた。たとえば鈴木愛氏はスナドリネコの生態を調べる際に現地の住民を調査者として雇用するという「住民参加型の調査」を実践していたが、これは研究行為そのものを当該社会に働きかける実践へと変換するものである。また横山泰三氏の報告では、自助グループの参加者が自ら問題を定義して研究し、その結果をもとに社会へと問いを投げかける様子がうかがえた。ここでは研究という営みそのものが、問題を抱える当事者同士をつなげるものであり、また当事者自身をエンパワメントするものとして機能している。研究者が、研究者“ではない”人たちを引き受けること、言い換えれば研究者にとってある意味で他者とされてきた存在を引き受けることが、今回の報告の特徴になっていたと思われる。

そして他者を引き受けるプロセスのなかで求められることは、単なる表面的な「他者理解」

にとどまらず、身をもって体験するということだろう。そうした意味で、蓮行氏の「多世代共創型演劇ワークショップ」がもたらす体験は、まさに他者を自身の身体に引き受けるものだった。

ここではすべての報告について言及することはできないが、上記以外の報告も含めた全体に通底していたテーマは、他者を視野に入れた共生・共存だと考えられる。共生はマジョリティによる「寛容」で実現するものではなく、特にマジョリティ自身の自己省察によってこそ成立しうるものではないか、ということに鋭く突きつけられた。今まで存在しなかったものを新しく生み出すことだけが「新たな価値の創出」なのではない。今まで「他者化」されて見落とされてきたものを包摂し、自らのうちに引き受けるということ。これもまた「新たな価値の創出」なのだということを、今回のオープンワークショップを通じて実感した。